

主 題：神の人

聖書箇所：コリント人への手紙第一 16章13-20節

コリント教会を愛するパウロは、教会の信仰者ひとり一人が霊的に成長すること、ひとり一人が主に喜ばれる人となること、そして、そのような人々で溢れる教会となることを願っていました。もちろん、それはコリント教会に限らずすべての教会にすべてのクリスチャンに言えることですね。それでもってパウロは今日私たちが見ようとしている16：13、14で「五つの命令」を与えています。私たちが覚えなければいけないことは、確かに、パウロはこの命令をコリント教会に与えていますが、この命令は「主ご自身の命令である」ということ。そして、これはコリントの教会だけでなく、時代を越えて、今の私たちの教会にも、また、あなたに対するメッセージでもあるということ、そのことを忘れてはいけないということです。

あなたは今から学ぶみことばをしっかりと学んで、それを実践することによって霊的に成長していきます。なぜなら、それが主のみこころだからです。正しい整えられた心をもって、みことばを通して語られる主のみこころを謙虚に受け入れることが必要です。正しい態度をもってごいっしょにみことばを見ていきましょう。このように記されています。Iコリント16：13、14「:13 目を覚ましていなさい。強く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。:14 いっさいのことを愛をもって行いなさい。」、ここには五つの命令が記されています。すべての動詞が二人称の複数で記されています。だから「あなたがた」です。特定のだれかに書かれたのではなく、教会のすべての信仰者に語られたものであるということです。同時に、現在形を使ってこの命令が記されているということは、このことを継続して行っていきなさいと、そのことをパウロは教えるのです。

A. 霊的に成長した者《神の人》を目指して = パウロが教える教会への五つの命令 13-14節

ひとり一人が霊的に成長した者となっていくようにと記されています。今日はたくさんの聖書箇所を記していますが、すべてをこの時間に見ることはできません。ですから、後でゆっくりその箇所を見てください。

1. 目を覚ましていなさい 13節

「目を覚まして」とは「注意深く、注意を怠らない、油断しないように」という意味です。ですから、パウロはコリント教会に対して「霊的に用心していなさい」と命じているのです。この「目を覚ましていなさい」という動詞は新約聖書に22回出て来ています。興味深いことは、その22箇所を見ることによって、私たちはいったいどういうものに対して目を覚ましていなければならないのか、どういうものに対して用心しなければならないのか、そのことを見ることができます。

○用心すべき五つのこととは？

1) 誘惑に対して

(1) 罪への誘惑 : 誘惑と言うとまず「罪の誘惑」を考えます。イエスはこのように言われています。マタイ26：41（並行箇所マルコ14：38）「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」と。憶えていますか？コリント教会は不品行がはびこっていた教会、性的不道徳が蔓延していた教会でした。そのことはIコリント5章ですでに学びました。5：1「あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。」。大変な罪です。イエスを信じていない人たちの中にも見られないような罪が教会の中に存在していたのです。確かに、そういう罪への誘惑があります。だから、そういうものに注意しなさいと言うのです。

(2) 世俗的なものへの誘惑 : 同時に、この教会の問題点、それは彼らは主の教えよりもこの世の知恵や姿勢を尊重していたことです。それらに傾倒していました。コリントの人々はこの世の知恵を愛した人たちです。だから、このように言えます。彼らはこの世の知恵を崇拜していました。だから、パウロはその虚しさ、無価値さを教えることで彼らの間違いを矯正しようとしたのです。Iコリント1：20「知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。」、同じIコリント3：19「なぜなら、この世の知恵は、神の御前では愚かだからです。こう書いてあります。「神は、知者どもを彼らの悪賢さの中で捕らえる。」、この世の知恵をどれ程用いてもそれによって罪の赦しを得ることはないから、この世の知恵をもって何が神に喜ばれるのかを知ることはないからです。

だからパウロは「気を付けなさい」と言います。この世は私たちを正しくない方向へ導いていこうとするからです。皆さんもよくご存じのように「この世と調子を合わせてはいけません。」(ローマ12:2)とパウロは言いました。つまり、この世の生き方や流行に心が奪われてそれらに倣って生きてはいけないということです。彼が言いたいことは「この世と同化してはいけない」です。なぜなら、この世を支配しているのは神の敵であるサタンだからです。ですから、この世が奨励する生き方や考え方、価値観に心を奪われて、主を信じていない人たちと同じように生きてはいけないということをパウロは教えて来たのです。他の箇所、Iヨハネ2:15-17にもこのように書かれています。「:15 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。:16 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。:17 世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます。」。

ですから、罪の誘惑に、世俗的な生き方への誘惑、それらから自分自身をしっかり守る必要がある、それらに用心しなければいけないということです。

2) 主の再臨に対して

二つ目に「主の再臨に対して」目を覚ましていなければいけないと教えます。マルコ13:34に「それはちょうど、旅に立つ人が、出がけに、しもべたちにはそれぞれ仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目をさましているように言いつけるようなものです。」とあります。「目を覚ましているように」と、何についてそのように言っているのか? 「主の再臨」についてです。イエスはもう帰って来られる、その兆候が世の中に溢れていると言います。その再臨に対して「目を覚ましていなければならない」のです。

イエスを信じている信仰者の中に主イエスの再臨を否定している人はだれもいないはずですが。なぜなら、それは私たち信仰者の希望だからです。そのことを確かに聖書は私たちに教えています。だから、主の再臨の確実性を信じています。それでいて、その緊急性を信じていない人が多いと思いませんか? 「イエスさまは必ず帰って来られる。」と告白しますが「でも、今日ではないでしょう! まだ、もう少し時間があるでしょう」と言います。だから、みことばは警告するのです。

ヨハネの黙示録にもそのことが記されています。16:15「——見よ。わたしは盗人のように来る。目をさまして、身に着物を着け、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである——」と。「油断しているときに来る」ということです。パウロもこのように教えています。Iテサロニケ5:3「人々が「平和だ。安全だ」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。」、言っていることは同じです。「油断してはならない」です。今日イエスが帰って来られても何の不思議もない。今日帰って来られる確率は高いのです。ですから、私たちはその備えをしていなければいけない。眠ってはいけない、目を覚ましていなければならないのです。

3) サタンに対して

ペテロ自身がこう言っています。Iペテロ5:8「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」と。サタンは何をしようとしているのか? サタンは救いに与ったあなたをその救いから滅びへと導くことはできません。救われたならその救いは永遠のものです。では、何をするのか? 神のことばに対してあなたが疑いを抱くようにと働くのです。「ほんとうに神はそんなことを言われたのだろうか?」と。なぜなら、みことばへの疑いを抱いたときに、その人は神への疑いを抱き始めるからです。ですから、パウロはこういう働きが今も為されている以上、しっかりと目を覚ましていなければいけない、用心をしていなければいけないと言います。

4) 背教に対して

正しい教えに背いていくということです。黙示録3:2、3にサルデスにある教会に対するメッセージが書かれています。「:2 目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行いが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。:3 だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。」と。いつ主が帰って来られるかわからないからその備えをしななければいけないのです。どのように備えをするのか? この箇所に三つの命令が書かれています。「思い出しなさい」「堅く守りなさい」「悔い改めなさい」と。つまり、あなたがたが学んで来た神の真理をしっかり守っていきなさい、もし、それから離れるようなことがあったなら悔い改めてその真理に立ち返りなさいということです。

確かに、神の真理から離れてしまう人がいないわけではありません。その原因は何か？みことばに対する畏敬を捨て去ってしまうことです。私たちが今手にしている聖書は神が私たちにくださったものです。ですから、どんなに時代が移り変わろうとも聖書の中には誤りが見つかりません。この聖書によって人間のすべてが変えられるからです。なぜなら、この聖書は私たちを造られた、世界のすべてを造られた神ご自身が与えてくださったものだからです。問題は「聖書は神のおことばだ」という思いをもって聖書を見ているかどうか？そのように扱っているかどうか？です。何か世の中のベストセラーの一冊のように扱っていないでしょうか？道理で、ルターが幼子を抱くかのようにいつも聖書を抱きながら椅子に坐っていたということを聞きます。愛する書物です。私たちのいのちです。ここには私たちの愛する神がどのようなお方を教えて書かれています。同時に、私たちがどのように生きていくのかを教えてください。神のみこころがここには記されているからです。

もし、私たちが聖書に対して畏敬の念を失ったとするなら、私たちは大変な問題に陥ってしまいます。みことばに対する敬意を失うなら、みことばの教えを聞いても「なぜ、それに従わなければいけないのか？」と思いませんか？本質的に私たちは聖書の教えに神の教えに従うよりも自分の思い通りに生きていきたいのです。一番にその生き方を邪魔するのは権威ある聖書のことばです。ですから、聖書に敬意を払わなくなったなら、「私の人生だから私の好きなように生きていく」とそのような罪の生き方が始まっていきます。

そうするとどうなるか？教会に来たときにそこに坐っていて語られるメッセージを聞いて、耳が痛いメッセージは聞きたくないのです。聞いていて「慰められる」とか「ほっとする」というメッセージを求め始めるのです。ですから、それぞれが自分の聞きたいみことばを語ってくれる教師や、そのような教会を捜すのです。パウロが世の終わりになるとそのようになると警告した通りです。Ⅱテモテ4：3、4「：3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、：4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」もし、私たちが自分の聞きたいことを語ってくれる教師や教会を求め始めるなら、気付かなければいけないことは、私たちは神が言われていることに「神が言われていることだ」と敬意をもって受け留めているのかどうかです。

みことばが開かれるときに、だれが語るのか？ではありません。神ご自身が私たちに語ってくださっているのです。ですから、私たちがみことばを聞く正しい態度は「主よ、どうぞお語りください。あなたのしもべは聞いております。」という謙虚さです。背教の原因の一つは自分自身にあります。神のおことばを正しく捉えているか？神のことばに敬意を払っているかどうかです。もし、それができなくなれば、私たちは間違った教えに心を開いてしまうでしょう。もちろん、そのような背教が起こる原因の一つは偽りの教師たちの存在です。それが5番目の「注意しなければならないこと」です。

5) 偽教師に対して

どんなところで神のみことばが語られるときに、サタンの働きも同じように為されます。危険なことは教会の中にもそのような偽りの教師たちが入り込んで来て、自分たちのメッセージを語ることです。ですから、神のことばを語る人たちの大きな責任は、神のことばを正確に語ることです。自分の語りたいことを聖書を使って語るのではありません。私たちの役割は神の語りたいことを代弁することです。神が何を言われているのか？私たちに何を伝えようとしておられるのか、そのことを正確に語っていくという責任があるのです。これは語る者の責任です。

同時に、聞く者の責任もあります。皆さんの責任です。それは、語られているメッセージが本当に主のみことばの教えに一致しているかどうか、そのことを吟味するという責任です。どんな学位をもっているかなどは大切なことではありません。どんな経験を積んだかもそうではありません。そこで語られているみことばは聖書を語っているのか？それとも聖書を使って言いたいことを語っているのか？です。その責任があなたにあるということです。

どうか皆さん、惑わされなさい。私たちは弱い者です。人間にはいろいろな肩書があります。その肩書で「この人の言っていることは正しい」とそのように思い込んでしまうところに危険があります。神のことばが開かれたときに、それが正しく正確に伝えられているのかどうか、それを吟味するのがあなたの責任です。「目をさましていなさい」とパウロは最初に教えます。

みことばを見ましよう。使徒20：27-31「：27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。：28 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。：29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。：30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。：31 ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひと

りひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。」、Ⅱペテロ2：1「しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現れるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。」

2. 堅く信仰に立ちなさい 13節

この「信仰」ということばは「信頼、確信」と訳せることばです。パウロが教えたことは「ひとり一人の信仰者が神の真理にしっかり立つ」です。神の真理にあなたの確信を置くということです。

* 信じた神の真理から離れないこと

私たちはⅠコリント15：1で福音を語ったパウロのメッセージを聞きました。「兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。」、つまり、神のことばを聞いた、そして、あなたがたは神のことばから福音を聞いた、神の救いを聞いた、その教えにしっかり立ち続けていきなさい、その真理から離れてはいけないとパウロは教えるのです。皆さん、私たちがイエスを信じた後、個人差はあると思いますが、自分の救いを疑ったことはありませんか？「ほんとうに私は救われているのかな？」と…。そのときに皆さんはどうしますか？過去の経験に戻って「こういうことをした、ああいうことをした」とそこに立ち返ろうとするのか？そうではない。聖書に戻るのです。神が何と言われているのか？そこに立つのです。それがパウロがここで教えようとすることです。あなたの信仰はしっかりみことばに根付いている、神が言われていることにしっかり立っている。救いにおいても、聖書から学んだ神の真理についてもそうだった。Ⅱテサロニケ2：15「そこで、兄弟たち。堅く立って、私たちのことば、または手紙によって教えられた言い伝えを守りなさい。」、その真理から離れないようにしなさいということです

皆さんにアドバイスです。何を信じているのか？たとえば、教理を学ぶということは大変重要なことです。それを憶えることも重要です。でも、もっと大切なことは「なぜ、私はこれを信じるのか」を学ぶことです。聖書は神のことばであると確かに聖書は私たちに教えます。教理を学んだならば必ずそのことを学びます。皆さんが「そうなのだ。聖書は神のことばなんだ。」と信じた、憶えた。もし、それだけなら大変弱いでしょう。あなたが「どうして聖書は神のことばだと言えるのか？」をしっかりと理解し納得したなら、どんな人からどんなチャレンジを受けても「聖書がそのように教えている」と言えます。

違いが分かりますね。ただ憶えているだけの人と、「なぜ、それが真理だと言えるのか？なぜ、それが聖書の教えだと言えるのか？」を学ぶ信仰者は、どんな間違った教えが入って来ても揺るぐことがないのです。そういう信仰者であれ、「堅く信仰に立ちなさい」とパウロは言うのです。みことばにしっかり立つことによっていろんな間違った教えに惑わされない、そういうもので動揺することのない信仰者になるようにと言います。

3. 男らしくありなさい 13節

Ⅰコリント13：11「私が子どもであったときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになったときには、子どものことをやめました。」。ここで言わんとしていることは「危険に直面している中で勇気を示すこと、勇敢である、勇気がある」という意味です。本来なら、男性に限定しませんが、普通なら男性は家庭にあって守らなければならない。パウロは敢えてそのことを引き合いに出して言うのです。どんなときでも「何が神の前に正しいのか」と正しい霊的判断ができる人だと言うのです。筋トレをして筋肉を付けなさいということではありません。霊的なことです。私たちは日々の生活でいろんなことに直面しますが、その中であって「何が神の前に正しいのか？何が神に喜ばれることか？」をしっかりと判断できる人、そういう人になることを教えるのです。みことばにしっかり立って主の前に正しい判断ができる人となるようにと。

4. 強くありなさい 13節

これも同じように肉体的な強さではなく霊的な強さです。「強くありなさい」ということばは「～に勝つ、打ち勝つ」という意味です。つまり、信者のひとり一人がどんな邪悪な影響にも支配されることなく、それらに打ち勝つことができるような強い人になりなさい、どんな誘惑に対しても打ち勝つことができるように十分な強さを持つ人になりなさいと、それが命令です。多くの皆さんはこれまでの経験で誘惑に対して敗北の連続だと、確かに、私たちは大変に弱い者です。イエスを信じたから強くなったか？そうではない。弱さは常にあります。何年信仰生活を続けて来たとしても、その弱さを日々経験する者です。でも、見てください。「強くありなさい」という神の命令がなされているということは「強くあれ」ということです。「強くありなさい」と命じた神は私たちが強くなることを知ってそのように命じておられるのです。間違いなく、私たちに神の助けが必要です。神の助けをいただいて私たちはそのような誘惑に対して打ち勝つことが出来るのです。

皆さん、私たちは多くの場合、誘惑に遭ったときに自分で何とか対処しようとしませんか？本来なら、私たちは神に助けを求めなければいけないのです。「神さま、助けてください！」と。そのときに神が働いてくださり神が助けてくださる。でも、多くの場合、失敗したときのことを思い出してみると、自分で何とか出来るとし、その結果、私たちは敗北を喫しています。神の助けが要ることを学ぶことです。

5. いっさいのことを愛をもって行いなさい 14節

「いっさいのこと」、つまり「すべてのこと」です。「行ないなさい」は「行動、振る舞い」のことです。ここではすべての行動の動機が何かを教えてください。それは「愛」だと言います。人々に対して愛をもって行動しなさい、愛をもって振る舞いなさいと言うのです。問題は、どのようにしてするのか？です。

○隣人を愛すること

恐らく、多くのクリスチャンの皆さん、またライブをご覧の皆さんは「良きサマリヤ人」という話をよくご存じだと思います。ルカ10：30-37に記されています。「：30 イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎ取り、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。：31 たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。：32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。：33 ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、：34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。：35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』：36 この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。：37 彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」

皆さんこの話はどんな文脈の中で話されたのか？イエスが何について話しているときにこの話を為さったのか？そのことをご存じですか？私たちはそのように全体の流れの中で何が話されているのか？イエスはこれを通して何を言いたかったのか？そのことを知らなければ理解したことになるのです。

実は、この時に一人の律法の専門家がイエスを試そうとやって来るのです。彼はこう言います。10：25「すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」と、どうすれば救いに与るのかと質問するのです。イエスは彼に言われます。26-29節「：26 …「律法には、何と書いてありますか。あなたはどの読んでいますか。」：27 すると彼は答えて言った。「『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ』、また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』とあります。」：28 イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」と。

そこで彼は言います。29節「しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」と、この質問に対してイエスは「良きサマリヤ人」の話をしたのです。この話を通してイエスが教えようとしたことは「隣人に対する愛とはその人を心からもてなすこと、その人の必要のために喜んで犠牲を払うことだ」と言われたのです。このサマリヤ人はそのようにしたのです。他の宗教家たちは何もできなかった。でも、彼は傷ついた人を見て、放ったらかしの人を見てかわいそうに思って彼のために最善のことを為すのです。喜んで犠牲を払ったのです。それが隣人を愛することだと言われたのです。

皆さん、私たちが隣人を愛するために、主が望んでおられるように本当に隣人を愛していくためには何が必要でしょうか？私たちがみな心を入れ替えているいろんなボランティア活動をして困っている人に手を差し伸べて…と、恐らくそのようなことを始めるなら、多くの人は限界を感じると思います。「もうできない！」と。なぜなら、それは無理なことだからです。

イエスが質問されたときに、確かにこの律法の専門家は答えたのです。「神を愛すること、そして、隣人を愛すること」と。この順序を絶対に間違っはいけないのです。つまり、心から神を愛しているならあなたは隣人を愛する人となるのです。なぜ、そう言えるのか？実際にみことばがそのように教えるからです。Iヨハネ4：7「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。」、愛はあなたから出ているのではなく神から出ていると、つまり、私たちが人を愛することにおいて神が人を愛するようにできますか？私たちの愛は自分の好きな人を愛する、それはできるでしょう。でも、それは流動的です。問題がなければ愛するけれども、問題があればそんな愛など吹っ飛んでいってしまう。そのようなことを私たちは経験しています。

みことばが教えることは、人間の愛によって神の愛を実践しようと試みても無理だということです。では、どうすればいいのか？神を愛することによってその神の愛がそのような働きを可能にするのです。つまり、あなたの主に対する愛が人への愛となってあなたから溢れ出て来るのです。だから、まず私たちは神を愛することです。神への愛が増し加わることを願うことです。そして、あなたが神の愛において成長するなら、間違いなくその愛は周りの人たちに対してあなたのうちから溢れ出て来ます。

皆さん、もし、あなたが主のお気持ちよりも人の気持ちを優先するなら、その人は主だけでなくその人をも愛していないことになるのです。どういうことか？私たちが優先しなければいけないのは神です。私たちが生きているこの地上での人生は、どのようにして神を喜ばせるのかという人生です。今、私たちは見て来ました。私たちはどういう選択が神の前に正しいことなのか、喜ばれることなのかを考えて選択するわけです。私たちが考えることは、人がどう思うかではなく神がどう思われるかです。ときに、私たちは愛する兄弟姉妹たちが聞きたくないことを言わなければいけないことがあります。もし、彼らが聞きたいことだけを言っているなら、その人にとって何のプラスにもなりません。一時的な慰めを得るかもしれないけれど、でも、それが本当に正しいかどうかです。

神はそのように私たちを扱われないでしょう。神のみことばはときに私たちの心に刺さって来ます。「ここを変えなさい！間違っている、正しくない！」と。私たちが愛するから神はそうしてくださるのです。私たちが変わらなければいけないところを示してくださるから私たちは変わりたいと願うのです。「変えてください」と祈るのです。

神を愛する人たちは、人々がどんなことを思うのか、人が自分のことをどう思うかなどはいつでも良いのです。考えていることはただ一つです。「神が私のことをどう思っておられるか」です。神が私を喜んでくださっているかどうかです。ですから、いっさいのことを愛をもって行ないなさいと、私たちがそれを実践する時に考えなければいけないことは、私は本当に主のお気持ちというものを優先して選択しているかどうかです。主に喜んでもらいたいという思いがその行動の動機かどうかです。

そのことを皆さんに分かっていただくために次のことを考えてみてください。イエスがこれから十字架に架かって殺され、そして、その死後三日目によみがえるということを弟子たちに話した時に、ある一人の弟子はそれを快く思いませんでした。その弟子はペテロでした。みことばはどのように教えているか？ マタイ 16 : 21-23 「:21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。:22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」、この「いさめる」ということばの意味は「非難する、叱責する、咎める、戒める、激しく真剣に警告する」です。このことばは通常、指導者がその管轄下にある者に対してすることです。ペテロは主である方に対してこのような態度をもって主を責めるのです。「イエスさま、あなたは間違っている」と。

この出来事を皆さん覚えていると思いますが、その時にイエスが何と言われたか？続いて23節「しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。」と、大変厳しいことばです。ペテロが話しているのに「下がれ。サタン。」と言うのです。なぜなら、このときペテロはサタンの代弁者となったからです。これはサタンが望んでいることだからです。サタンはイエスが十字架にかかって私たちの罪の身代わりとなって死ぬことを快く思いません。だから、このサタンの願いをペテロが代弁したわけです。だから、イエスはこのように言われました。「あなたはわたしの邪魔をするものだ。」と。その後イエスが何と言われたか？「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」と。確かに、ペテロは自分の愛するイエスがこれから十字架で殺されてしまうということを聞いた時に歓迎しなかったでしょう。その気持ちは分かります。でも、彼は神のみこころが何かではなく自分の考え、自分の思いを優先するのです。だから、イエスは「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」と言われたのです。

私たちが人々と接する時に愛をもって行いなさいと言われましたが。本当に主を喜ばせたいのか？それが動機でしょうか？それがどんな行為であったとしても、もし、あなたがその思いをもってやっているなら、主はそれを喜んでくださる。私たちの責任は自分のこと人のことではなくて、神のことを先ず優先するのです。神が喜ばれることを選択するそんな信仰者であるはずで、そんな教会でなくてはいけません。

さて、パウロはこうして五つの命令を与えました。すべての信仰者が実践するように、しかも、継続して行うようにと教えます。

- ・目を覚ましていなさい : 誘惑がある、再臨が近い、サタンの働きがある、背教が実際に起こっている、偽教師がいる、だから、それらに油断してはいけない、目を覚ましていなさいと言います。
- ・堅く信仰に立ちなさい : 神の真理から離れないように。
- ・男らしくありなさい : 主の前に正しい判断をするように。
- ・強くありなさい : いろいろな誘惑があるから、それに打ち勝つように。
- ・いっさいのことを愛をもって行ないなさい : 愛をもってすべてのことを行いなさい。

もし、皆さんがここにあるように五つの命令を実践しているなら、その人の信仰は間違いなく成長しています。こんな歩みをしているならその人の信仰は間違いなく成長しています。そのように信仰が成

長した霊的な人のことを聖書の中では「神の人」という表現を使っています。神はあなたや私、すべての人が「神の人」となることを願っておられます。そのことを私たちは知っています。

皆さん、「神の人」という用語は聖書の中に78回出て来ます。そのように呼ばれた人物が13人います。その人物すべてを見ることはできませんが、一人だけ見たいと思います。その人はイスラエルの王であったダビデ王です。使徒13:22をご覧ください。「それから、彼を退けて、」「彼」とはダビデ王の前のサウル王のことです。「…ダビデを立てて王とされましたが、このダビデについてあかしして、こう言われました。『わたしはエッサイの子ダビデを見いだした。彼はわたしの心になつた者で、わたしのころを余すところなく実行する。』」。

皆さんに見ていただきたいのは二重カギ括弧のところです。『わたしはエッサイの子ダビデを見いだした。彼はわたしの心になつた者で、わたしのころを余すところなく実行する。』。ここに「ころ」ということばが一つは漢字でもう一つは平仮名で書かれています。訳者は意図的にこのようにしたのです。というのは、この二つは異なったギリシャ語が使われているからです。同じことばではないのです。最初の「わたしの心」とは神の心に関して「神の考え、神の感情」という行動を生み出すところです。もう一つの「わたしのころ」と平仮名で書かれている方は、「神ご自身の意志、神の願い、望み」という意味です。

ですから、2017年度版の新改訳聖書は「彼はわたしの心になつた者で、私の望むことをすべて成し遂げる。」と訳しています。そのような区別をつけています。というのは、全く違うことばが使われているからです。これは私たちにダビデという人物がどのような信仰者であったかを教えてくれているのです。ダビデ王は、

・わたしの心になつた者 : この「わたし」という平仮名は神のことで、神ご自身がそのように言われているのです。そして、「なつた者」とは「それに従っている、それと一致している」という意味です。ですから、神の心とダビデは一致したのです。間違いなく、ダビデは神がお考えになることを考えながら行動していました。だから一致していたのです。

・わたしのころを余すことなく実行する者 : この「実行する」というのは「行う、成し遂げる」ということです。すべてを成し遂げるのです。先に見たように、ダビデは神のお考えと一致して行動しただけでなく、神ご自身が望んでおられるという二つ目の「ころ」、それを余すところなく行ない成し遂げようとしていたのです。ダビデはこのような人物であったと神ご自身が言うのです。

でも皆さん、ダビデという人のことを思い出すと「ダビデって罪を犯したではないですか？」と言いませんか？確かにそうでした。姦淫の罪を犯したし殺人の罪を犯し嘘をつくこともありました。それでいながら、なぜダビデはこのように神によって呼ばれたのでしょうか？

ダビデは常に自分の罪を神の前に告白して、神の前を正しく歩み続けようとしていたからです。世界中を見て人間の歴史を見て、神の救いに与ったすべての人を見たときに、イエスを信じ救いに与った後罪を犯さなかった人は一人もいません。問題は、その罪を神の前に告白しながら生きているかどうかです。ダビデはそのような人物だったのです。彼は常に神の前を正しく歩んでいきたい、神のみこころに従って生きていきたい、神に喜ばれることを行っていきたいと、そのような思いをもって生きていたのです。確かに罪はありました。私たちと同じように…。でも、彼はそのように罪を清算して神の前を正しく歩み続けていたのです。だから「神の人」と呼ばれたのです。

○「神の人」とは「、主を第一に愛している人」、ゆえに、

- (1) 主のみことばを実践する人
- (2) 主のみこころを求めてそれに従う人
- (3) 主の憎まれている罪を憎む人
- (4) 主のためならどんな犠牲もいとわない人

主の前を私は正しく歩んでいきたい、主に喜んでいただきたい、そういう思いをもって生きている人、それが「神の人」であり、そして、パウロもコリントの教会の人たちに、そして、私たちにそのような人へと変えられることを望んでいるのです。ミカ書6:8に書かれている通りです。「主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。【主】は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行い、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。」

B. 兄弟愛の実践 15-20節

15節から見ていくとここには「兄弟愛の実践」が書かれています。

1. ステパナの家族 15-16節

15-16節「:15 兄弟たちよ。あなたがたに勧めます。ご承知のように、ステパナの家族は、アカヤの初穂であって、聖徒たちのために熱心に奉仕してくれました。:16 あなたがたは、このような人たちに、また、ともに働き、労しているすべての人たちに服従しなさい。」

1) アカヤの初穂 15節: 15節に「勧めます」ということばが記されています。パウロ自身の願いです。「ご承知のように」と書かれてあるのはコリントの教会ではこのステパナ、ステパナの家族のことはよく知られていたからです。ステパナは「アカヤの初穂」と言います。アカヤとは現在のギリシャの南部を指しています。コリントもそこに含まれるのでしょうか。パウロの伝道を通して恐らく最初に救われたのでしょうか。Ⅰコリント1:16に「私はステパナの家族にもバプテスマを授けましたが、そのほかはだれにも授けた覚えはありません。」と書かれています。パウロの働きによって信仰に与り、そして、バプテスマを受けたその中の一人です。

2) 熱心な奉仕者 15節

彼は「聖徒たちのために熱心に奉仕してくれました。」とあります。「熱心に」とは「非常に献身的に」です。「奉仕」ということばがありますが、このことばから執事、教会の役員の執事ということばが出ています。つまり、この人は人々に仕えたのです。仕える人、謙遜に従順に人々に仕えたのです。教会の役員はみなそうです。ふんぞり返るのではないのです。みんな人々に仕えるのです。喜んで謙虚に人々に仕えた、そのような人物だったと言います。ですから、パウロは勧めを為すのです。

3) パウロの勧め 16節

原語には16節の初めに「だから」という接続詞が付いています。この人がこのような働きをした、だから、あなたがたは彼をこのように扱いなさいと言うのです。それは「服従しなさい」です。なぜ、このことばが書かれてあるのか？それはこの人たちが霊的な人たちだからです。今見て来たように、彼らは喜んで人々に仕えていたのです。主に喜ばれる働き人でした。ですから、パウロは「彼らに従いなさい、彼らの模範をしっかりと見てその模範に倣って生きなさい」と言うのです。

しかも、「ともに働き、労しているすべての人たちに」とあり、ステパナだけでなくそのような人たちがいたのです。その人たちに従っていきなさい、その人たちを模範にしなさいということ。す。「ともに働き、労している」、この「労している」とは「くたくたになるまで働いた」、つまり、人々のために本当にすべてを犠牲にして仕えていた、だから、彼らに倣って彼らに従っていきなさいということ。す。

2. ステパナの同労者たち 17-18節

「:17 ステパナとポルトナトとアカイコが来たので、私は喜んでいます。なぜなら、彼らは、あなたがたの足りない分を補ってくれたからです。:18 彼らは、私の心をも、あなたがたの心をも安心させてくれました。このような人々の労をねぎらいなさい。」

1) パウロの感謝 17-18 a節

コリントの人たちはパウロがいるエペソに来ることができなかった。ですから、この三人（ステパナとポルトナトとアカイコ）が訪問してくれたのです。教会ができなかったことを彼らがしてくれた。彼らの訪問によってパウロは励まされたのです。いっしょに祈り合い、いっしょに励まし合っていた、それによってパウロの心が満たされたのです。パウロは彼らの訪問を喜び、コリントの人たちができないことを彼らがやってくれた、「あなたがたの足りない分を補ってくれたから」と言います。その結果このように言っています。

「安心させてくれました」と、原文ではこのことばが18節の文頭に出て来ています。このことばはよく皆さんが知っている マタイ11:28「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」の中の「休ませてあげます」ということばが、ここで使われている「安心させてくれる」ということばなのです。また、同じことばがピレモン書7節では「:7 私はあなたの愛から多くの喜びと慰めとを受けました。それは、聖徒たちの心が、兄弟よ、あなたによってカづけられたからです。」、「カづけられた」と書かれ、20節では「:20 そうです。兄弟よ。私は、主にあって、あなたから益を受けたいのです。私の心をキリストにあって、元気づけてください。」、「元気づけて」と書かれています。パウロが言っていることは分かりますね。彼らの訪問によって「私の心は休息を得た、私の心は元気づけられた」と言うのです。なぜなら、案じていたコリント教会のことを聞いたからです。

同時に、「あなたがたの心をも」と、コリント教会のことも書かれています。彼らも安心させられたと。彼らは自分たちのことを報告したけれども、電話のある時代ではありませんから、この三人が行ってくれることによって自分たちの現状をパウロに伝えることができたわけです。ですから、それによって心が安心したということ。す。パウロもコリント教会の人たちも双方とも「安心した」のです。

2) パウロの勧め 18 b節

「労をねぎらいなさい」とはおもしろいことばです。「知り尽くしなさい」という不思議なことばが使われています。その人たちがどういう人たちなのかを「知り尽くすように」と言うのです。そうすることによって、この人たちはねぎらいにふさわしい人たちだと言います。この「ねぎらう」とは「尊敬する」ということです。彼らのことを知れば知るほど、その働きを見てその人柄を見て、本当にこの人たちは尊敬に値する人だと、だから、その人たちに尊敬を払いなさいとパウロは言うのです。みことばを

見てください。ピリピ2：29「ですから、喜びにあふれて、主にあって、彼を迎えてください。また、彼のような人々には尊敬を払いなさい。」、Iテサロニケ5：12「兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。」。

パウロはこうしてステパナの家族や同労者、ステパナといっしょに来た二人の人たちを挙げて、その人たちに対して心からの尊敬を払いなさいと言うのです。マッカーサー先生はこのように言っています。「私たちが神のみことばに忠実な人、イエス・キリストの働きのためにいのちをささげている人を見つけたら、その人をまねるために最善を尽くすべきだ。そして、私たちはその人に、男女に関係なく、最高の尊敬を払うべきだ。それが為されるなら、キリストの教会は単なる組織としてではなく有機体、生きたからだとして機能する。」と。教会で大切なことはそこでキリストのすばらしさが現わされているかどうかでしょう。建物はどうでもいい、生きた人々の集まりです。この群れが本当にみことばに従って正しい歩みをしているなら、主のみわざがその群れを通して為されていくのです。死んだ教会ではだめです。生きた教会でなければいけないのです。

3. アジアの諸教会からのあいさつ 19-20節

19-20節「:19 アジアの諸教会がよろしくと言っています。アクラとプリスカ、また彼らの家の教会が主にあって心から、あなたがたによろしくと言っています。:20 すべての兄弟たちが、あなたがたによろしくと言っています。聖なる口づけをもって、互いにあいさつをかわしなさい。」と、挨拶が記されています。

1) アジアの諸教会 19節

「アジア」とはローマ帝国のアジア州のことです。地図を思い出してください。あのトルコです。トルコの西、その西側の1/3の領域が「アジア」と呼ばれた地域です。そこにある幾つかの教会からコリント教会にあいさつが送られたのです。

2) アクラとプリスカ

この人たちは元々ローマに住んでいました。紀元49年か50年にローマ皇帝クラウディウスがすべてのユダヤ人をローマから追放することになります。恐らく、その時に彼らはローマからコリントに移り住んだと思われます。なぜなら、パウロがコリントに行った時に彼らと出会っているからです。使徒18：2にそのことが記されています。「ここで、アクラというポント生まれのユダヤ人およびその妻プリスキラに出会った。クラウデオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令したため、近ごろイタリアから来ていたのである。パウロはふたりのところに行き、」と。その後、彼らはコリントからエペソへと移っています。そして、その彼らからコリント教会へのあいさつがここに記されているのです。

皆さんに見ていただきたいのは「アクラとプリスカ、また彼らの家の教会が主にあって心から…」というところです。ということは、この二人は自分たちの家で教会を持っていたということです。紀元3世紀まで「教会」というものは存在していません。教会は人々の家で守られていたのです。この二人はどこに行っても神のことを伝え、そして、自分たちの家を神を礼拝する場所としていたのです。彼らと彼らの家の教会からあいさつを送っているのです。

3) すべての兄弟たち 20節

20節には「すべての兄弟たちが、」とあります。つまり、今含まれていなかった人たちです。恐らく、エペソに存在したこのアクラとプリスカの教会以外の教会が、その兄弟たちがあなたがたによろしくと言っているということです。その後パウロは「聖なる口づけをもって、互いにあいさつをかわしなさい。」と言っています。パウロはこのような行ないを継続しなさいと言ったのではありません。その背後に大切な意味があるのです。本来、クリスチャンたちの間に存在するはずの愛、赦し、一致を象徴的に表現しているのです。ただこのような行為をしたからそれで良いということではありません。パウロが望んでいるのは、教会の中において兄弟姉妹たちが本当にキリストによって与えられたその愛をもって愛し合い、互いに罪を赦し合い、そして、主にあって一致している、そのことを彼は期待したのです。このような「聖なる口づけをもって」という行為よりも、それよりもこの教会が主に喜ばれる教会になるようにと、それを願ってこのあいさつを締め括っているのです。

今日はたくさんの方を見て来ました。でも、パウロはこうしてこのコリント教会に対して彼らが成長することを願っていました。彼らが本当に愛し合って、いたわり合って、赦し合って、励まし合って、仕え合って、神の栄光を現わす個人として、また、そのような教会となることを願っていました。確かに、私たちがこの五つの命令を見るとき、このようなクリスチャンの歩みを見るとき、私たちの肉が言うことは「こんなことは私にはできない！無理だ！」です。でも、皆さんその嘘に騙されてはいけません。神は「できる、わたしが命令を与えられたのだから…」と言われる。それは、あなたの弱さを知っている神がそのことを知った上で命じているのです。あなたの愚かさを知った上で命じているのです。なぜなら、この命令は実践できるからです。

では、どうすればいいのか？それが大切です。それは神の助けによってのみ為されるのです。神の命令を実践するための力、神が言われたことを実行するための力、それを何と言うか皆さん覚えていますか？特別の名前があります。それは「恵み」と呼びます。「恵み」によって救われた私たちが、「恵み」でもって生きていくのです。いつも神の助けをいただきながら主のみこころに従うのです。そうして私たちは生きるのです。その時に成長するのです。その時に神が喜んでくださる。そんな個人が、教会が生まれてゆくのです。

そのように今日から歩み始めてください。主はあなたを祝して用いてくださいます。